

大学教授の成績簿

序によせて——— 広瀬鎌二

大学というところ

銀座のさる喫茶店のコーナーに、場違いの男ども三、四人が、かなり長時間なにやらむつかしい顔をして話し合っていた。

これが、その後27年間も、大学という象牙の塔？の中に閉じ込められる運命の日であったとは……。人生とは、見通しのきかない霧の中を、何者かの手で引きずられているようなものなのかもしれない。

そういえば、専任になる直前の3月、蔵田先生が急逝されるという、大事に遭遇する。これこそ誰もが予想することのなかった、偶発的な出来事であり、結果として、恩師の後を継いだことになった。これも見えない手のなせる技か。

こうして宿命の糸に引かれるように、大学に籍を置くことになったのだが、何分教育の現場など全く経験したことのない素人である。大体、学生というのがどういう人種なのかも知らない。もちろん、かつて学生だったことはあるが、20年も前の話であるし、この間学生を意識して若い人に接したこともない。さらに困ったことに、卒業後5年位は戦中戦後ということもあって、会社勤めをしたこともあるが、その後は設計畑を歩いてきたし、最後の10年間は、ワンマン事務所で独裁権を振っていたのだから、およそ組織というものについて体験がない。

こんなことがどうやらわかりかけてきた頃、突然嵐のように襲ってきたのが、学園紛争である。このとき研究室に、闘争の指導者という東大生がやってきた。長い話しの末「話しはわかった。だが本気で改革を求めるとなら相手がちがう。なぜなら大学は文部省の末端機関にすぎない。闘う相手は文部省である。」と言ったことを憶えている。彼等は自分達のパワーのために自滅したが、これは当時組織というもののありかたを知った実感であったと同時に、はからずも、この紛争で多くのことを学ぶことができた。

その第一は、自由の貴重さを知ったことである。それまでは自由のありがたさを特別に意識しなかったのが、組織という人間不信の世界に入って、はじめて闇に指す光の存在を知り、自由を守ることは、自由を認めることであると教えられたことは収穫であった。

教育ということ

学生とは何と反応の鈍い、手の動かない集団なんだろう。というのが、素人教師の第一印象であった。それは、職業設計屋にとって信じられない状況だったのである。

遅いのは仕方がない、ならば時間を与えよう。これが課題提出は本日中*となる。それでも思うような成果はあがらない。そこで彼等には、図面化するという基礎技能が不足していることを知る。レタリングにはじまる製図カリキュラムは、この目的で作られた。

*注：「本日中」とは広瀬の製図課題提出の締切時間についてのこと。通常の製図の授業時間は午後5時までだが、広瀬の課題に限っては夜の12時まで、つまり「本日中」ならいつでも時間を使った。

一方彼等は、考えることを知らない。創造は、思いつきではない、単純な発想は前例のコピーに流れやすい。自力で考える力を付けさせるにはどうするか。当時提唱されていた、設計方法論の手順分析を、応用して試してみようと思いついたのが、調査、統計処理、モデル化、実体化を講義と実習で行う「計画1」である。

これでどれ程の効果があったかということ、学生とは、モデルのトレースには優れているが、その真意を理解して自分の物にできるのは5%に満たないことがわかった。これが常にかなりきれいに正規分布するから面白い、以降、多くを期待することは、お互いに労多く効少ないことを知る。

それでは、教育とは何なのかと考える。創造を至上の目的としてきた人間にとって、後に続く若い人達も、そうあって欲しいと切に思う。まして建築が、出来上がったときから機能するものであれば、常に未来を指向することになる。ところが知識とは、例外なく過去の集積にしか過ぎない。創造の糧となる知識とはなんだろうか。

人は快い感動を求める。音楽、絵画、文学、造形美術、そして建築も例外ではないとすれば、人類は常に感性が求める美意識の基に、よりよい環境の創造に努めてきたはずである。結果の善し悪しは、時々の評価によっても、今残る歴史遺構の数々は、そうした試行錯誤の足跡なのである。これを博物館の埃をかぶった展示物とするのではなく、我々と同じ人間の、目的完遂への苦闘の跡と見れば、これらの遺構が語りかけてくれる教訓には、耳を傾けるべきものが多いことを知る。歴史こそ不可欠の知的教養なのである。

成果品のこと

この本は、研究室27年の歴史の記録である。ということは、これが私にとって大学時代の成果品の全てということになる。

正確には全てではなく、主要な部分といった方がいいかもしれないが、かつて作家として建築作品の制作に専念していた時代から、一転して教育者として何ができたかの答がこれである。

この内容は大きく三つに分かれている。前段は、実務時代の延長としての建築作品である。大学に来たばかりの時は、きれいに足を洗うわけにいかなくて、実施図面も書いていたが、設計の実務と教育とは両立しにくいことが、次第に明らかになると、それでも何とか研究と両立しないものかと、ことわりきれない仕事に絞ったが、それでも負担が大きすぎて、終に基本設計だけになる。

その中で、肆木の家は図面が未完のまま、学生と共に実物を作ってしまう、暴挙といわれかねないこともやっている。作品の数が少ないので、多くは既発表だが、改めてまとめてみたのがこれである。

次は研究論文で、これが成果の主役であることはいうまでもない。テーマはご覧いただくように多様である。およそ建築計画とは、人間生活の全てを対象にしているから、無限に多様になるのが自然の成り行きであろう。ここではそれを、建築に結びつけるのに苦労したというのが正直なところである。

ここには年表がついている。この27年間に研究室で行われた主な行事を、この機会に資料化しておくことが目的で、卒業生諸君がこれを見て、当時のことを思い出してもらえれば幸いである。

最後に、研究室卒業生の社会に出てからの活動を紹介している。建築の仕事は、一人前とされるまでに、10年あるいは20年の経験を必要とするとされている。

であるとすれば、教育の真の成果は、ここで学んだ諸君達が、建築界にどれだけ貢献をしているかによって評価されることになるだろう。もちろんここに収録したのはその全てではない。実は集まりが悪かったらどうしようと思っていたのが、自選他薦、思いの他大量の応募に、選別に苦労したのが実状である。今後益々の活躍に期待したい。

寄稿

広瀬謙二にゆかりのある方々に、編集委員会で「何かメッセージを」とお願いした。広瀬謙二にとって武蔵を定年で退職することは、大学教授としての区切りであって、建築家という立場、あるいはデザインに関わる専門家としての立場からは何も変わることはない、と広瀬自身は言っている。しかし、そうは言っても、われわれの方から見れば、これは大きな節目だと感じざるをえない。「大きなことはしなくてもいい」と広瀬からは言われたが、こんな機会でもないと頼めない方々にメッセージを寄せていただくこともたいせつなことだと意見が一致した。ご多忙中にもかかわらずメッセージをくださった諸先生に感謝したい。(編者)

静かな隣人

鉄骨住宅事始め

いつごろから彼と親しくなったか覚えていないが、いずれにせよ広瀬鎌二の鉄骨住宅は1950年代の『新建築』『建築文化』の常連であり、私も戦後のプレファブ論議や集成材の幼稚園を発売したりしていたから、お互いに名前は知っていた。

一緒に仕事をする動機は、軽量鉄骨構法の開発プロジェクトである。昭和30年、大手鉄鋼メーカーは冷間圧延装置を導入して、3.2mmくらいの薄板形鋼の量産に踏み切った。これは今までの重工業から中小規模建築に利用できる鋼材であり、木の住宅から不燃住宅への転換という国策にも沿っていた。学会から鉄骨系とともに、いわゆる構法研究者が動員された。2人とも30代の若手メンバーとして参画した。研究プロジェクトは断面形を決めることから出発したので□┐└┘みたいな今までの鉄骨にない、建築的に使いやすそうなものが提案され、実現した。広瀬氏は水を得た魚の如くになったのであるが、今までアバタ面の鉄骨で造っていたものが、急にキレイな多種類のものが使えるということの戸惑いもあったはずである。

彼は報告書の作成よりも、実際のケーススタディやモデルハウスの設計に励んでPRしたわけである。鉄骨住宅の美しさ、合理性は当時の時代精神として、米国のフィリップ・ジョンソンやミース・ファンデル・ローエが世界に紹介した時期でもある。私もこの機会に鉄骨小住宅を建ててみようと考えた。わずか13.5坪のワンルームで、プランは後にフレキシブルにできるので、ピロティの外観と新材料構法に力点を置いたものである。それは和風真壁を鉄とパーライト（スレート）板で表現したもので、いわゆるガラスの家とは異なるものであった。ディテールを考えるなかで、広瀬さんにアドバイスを受けたことはいろいろあった。記憶に残るのは雨戸の鴨居である。ここはチャンネルの楣の中に、さらに小さいチャンネルをビス止めして、このフランジに雨戸の上端に切った溝をはめ込むのである。これを鴨居のコペルニクスの展開という。敷居はZ鋼を横に使ってレールを溶接すればよい。これは成功したが誰もマネする人はいない。やがて、プレファブに吸収されていき、多くの建築家は空間設定には興味を示すが、同様な関心を構法や材料には示さなかった。それでも仕方がない程、関連部品が発達しすぎていったのである。

飯塚五郎蔵（昭和女子大学教授、横浜国立大学名誉教授）

純粹、凝り性、信念の人

彼と私とはヒョロリ長身、斜に構えたものの考え方の共通点から、よく似ていると思われているが、そうでもない。彼の方がずっと純粹で凝り性である。「誰が何と言おうと……」という信念の人である。母校で研究生活に入ってから、古代文化と木造に凝り始めた。学会の資料集成「技術」を一緒にやったとき、誰もやり手のない木造構法の内容を、結局彼が天平、中世の寺院から近世民家とつなげて、現代編が私の担当みたいになった。内容は設計資料というより研究資料といった方がいいようなものだが、きれいな構造パスが楽しめて、むしろ国際的ではあるまいかと思った。

というわけで、10年前に彼の建てた自邸も純粹、凝り性の標本である。まず、巨大な御影石乱積の石垣を造った後に、高低差の定まらない玉石地業。その上に、いわゆる足固の方式の和風軸組という難工事である。これを学生、院生を含めて研究室総動員で、先生自ら毎日夜半までやっていたのだが、工期は大幅に遅れ、ついに元の家を出なければならなくなった。そこで、広瀬夫妻は私の鉄骨住宅（前述）に1年近く仮寓することになった。これは軽量鉄骨が30年以上充分に耐えられることの証人にもなった。

同じ敷地に住みながら、お互いに忙しくてゆっくり話をする暇もなかった。あの種の遠慮とテレがあつてそうなる。ところが、細君どうしは仲がよい（東京府立第六高女の同窓）。情報ネットはしっかりと張られている。そして2人とも旦那の仕事をあまり評価しない。

鎌倉建築家クラブというのがある。かなり以前から市民への啓蒙、行政への注文という労多くして功少ない問題に取り組んできた。広瀬氏が鎌倉生まれであることを知って（私は小学3年から在住）、何となく一目おくようになった。この場合でも例によってあまり大きな声を出さないが、ユニークな提言をするとともに、バックデータを独力で造ってしまう。若宮大路をどうするかテーマでは、彼は両側並みの連続ファサード写真を「巻物」としてたちまち造ってしまった。寡言実行の人である。この会は仲良しクラブの性格も濃く、全員が次々に建てる新邸を会場にする楽しい行事も続いたが、それにも飽きて目下休眠中である。会員それぞれの高いポテンシャルを維持しながら、これを結集して役立たせる日を待っている。

広瀬先生の情熱

現在の日本における社会環境からは想像することすら困難となっていました。太平洋戦争に敗れた直後の首都東京をはじめ、多くの都市は、その大部分が文字通り焼け野が原となっていました。

永年住みなれた住居を焼かれ、生活の場を失った人々の数は何十万人にもものほり、とにかく雨露をしのぐことのできる家を、できるだけ早く供給することが、当時の緊急かつ重要な社会的課題でもありました。

昭和20年代の当時、日本の大部分の人々は経済的にも貧困のどん底にあえいでおり、「いわし一匹、米半合よこせ」というプラカードを掲げたデモ行進が毎日のように国会議事堂周辺に見られたものです。広瀬先生や私などが建築界に身を置いた当初は、このような社会環境のさなかにあつたのです。

少しでも質がよく、生産コストの安い住居を、より大勢の人々に供給するにはどうしたらよいか、というテーマは、建築家広瀬鎌二にとって、当然の課題であつたと思います。

私自身も、そのための有力な手段として、当時としてはまだほとんど現実化されていなかった建築生産の工業化とか、それにとまなうモデューラー・コーディネーションの問題に取り組み始めていました。広瀬先生は、その頃すでに当時としては全く新しい工業製品としての軽量鉄骨による住宅のきわめて優れた作品を次々と『新建築』誌上等にSHシリーズとして発表しておられました。

それは、私自身の研究テーマと全く目的を一つにするもので、ごく自然に学会等におけるモデューラー委員会などで同席するようになり、やがて深夜まで時間を忘れて議論を楽しむ間柄になりました。当時の常連には故池辺陽先生、内田祥哉先生、寺田秀夫先生など、みな30才になるかならない年齢でした。

当時から、広瀬先生はもっとも新しい工業化技術を追求される場合、その基本に つねに日本の伝統文化ともいべき古建築の木組み等に深い造詣をもっておられ、その心を大切にされていました。それは彼の作品で徹底的に追求される美しいディテールに表現され、彼独自の世界を開拓しているといえます。

広瀬先生は優れた研究者であり、建築家ですが、同時に大いなる教育者でもあると私は心から敬意を払っています。

池田武邦（建築家、日本設計代表）

私達が日本設計を創設して間もない頃から、先生の直接指導を受けた教え子を何人が推薦していただいておりますが、今まで誰一人期待はずれの人はおりませんでした。先生はほんとうによく学生を指導し、学生を親ておられると感心させられます。

先生の推薦は100%信頼できるのです。一度こんなことがありました。先生推薦の学生を面接し、採用を内定していましたが、後で先生の方から、その学生は日本設計に不適であることがわかったので、採用を取り消してくださいと申し入れがあり、その通りにしたことがありました。先生はけっしていい加減に就職の世話をするのではないのです。研究も設計も教育も徹底的に納得いくまで身体を張ってぶつかっておられるのです。

近く日本建築学会から「モジュール」の本が出版されます（注：『建築家のための国際製図法』）。広瀬先生が中心になって編纂したものです。その中で「国際モジュールは標準化の基礎である」として、次のように述べておられます。「敗戦後、日本は自由民主主義国として世界に貢献することを宣言した国なのである。さらにいままでは所得倍増を目標に、輸出振興を旗印にして、馬車馬のように駆け抜けてきたが、いまはその目標を超えて名実共に経済大国としての地位を確保した。これからは、国内需要だけに依存できない小国の経済発展のための手助けとして、日本の巨大な国内市場が期待されることになるだろうし、これは自由国家群の中の経済大国として当然果たさなければならない義務でもある」、「国際規格としてのモジュールとモデューラー・コーディネーションの採用は、今日の我が国建築界にとって、選択の余地のない重要課題である」と情熱を吐露されています。

また、国際社会で「孤立する日本の建築界」を憂い、「鎖国か、開国か」と日本の建築界の国際的視野の狭さに激しく警告を発しておられます。

敗戦直後、20才代の若さで日本復興のために燃やした情熱を、70才になって、日本が経済大国となった今、国際社会に貢献すべく、ますますその情熱を燃やしておられる様が、その文章の行間に溢れています。ますますの御健勝と御活躍を心から祈念してやみません。

広瀬先生のご活躍を祈る

伊藤延男（神戸芸術工科大学 教授）

建築学のなかでも歴史を専門とする私が、広瀬鎌二先生御退職記念の出版にメッセージを寄せるのは、いささか場違いと感じられる方々も多いかもしれません。しかし、実は先生からは専門の領域でいろいろなことを教えていただき、またお世話になりました。そこで、ここに御礼のつもりで一文を寄せさせていただくこととしたのです。

もうずいぶん前のことになりますが、たぶん昭和40年頃だったと思います。彰国社で『伝統のディテール』という本が出版されることになりました。この本のねらいは、異色の組み合わせになる編集委員会にあったらと思うのです。すなわち、建築計画側からは主任となられた広瀬先生のほか高瀬さん、一方歴史側は、現在奈良国立文化財研究所所長の鈴木嘉吉さんと私という組み合わせでした。編集会議を重ねていくうち、私は広瀬先生がたいへん歴史に御堪能であることを知り、編集作業は緊張のなかにも実に楽しいものとなりました。

もっとも、先生は鎌倉のお宅から市ヶ谷の彰国社まで愛車を運転して来られるので、自然に到着時間は不定となり、三人が待ちぼうけを喰らうことも稀ではなかったことは事実でした。これにはいささかまいったのですが、しかし、いったん到着されると、先生は芯だけの色鉛筆の一揃いの中から、お好みの一色を取り出してホルダーに挟み、極限まで鋭く削って、これでレイアウト用紙に美しい枠を引いていかれるのでした。これは見ているだけでも楽しいものでした。

この仕事が終わってしばらくご無沙汰しているうち、数年たって、先生の弟子に当たる矢野和之さんが「文化財保存計画協会」という団体を設立して、文化財建造物の修復や遺跡の整備、あるいは史跡内建物の新築を手掛けられるようにな

り、私の専門と大いに関係が出来てきました。さらに数年後、つまり昭和52-3年頃からと思いますが、広瀬先生がこの協会の理事長として就任され、再び先生が私にとって身近な存在になりました。

矢野さんはいかにも広瀬門下生らしく、とても丁寧な仕事をする人と感心しています。記憶に残るものとしては、熊本城宇土櫓の神経の行き届いた修復工事や、石積工事に構造的な配慮を取り入れて行った観音山古墳の復旧工事などがあります。まだ、現場を見ていませんが、現在は上野国分寺跡の整備をやっておられると聞いています。

でも、ここは矢野さんを誉めている場合ではありません。言いたいことは、広瀬先生が彼の仕事を理事長として指導され、温かく見守っておられ、さらには、ここぞという所では自らのり出す労をとっておられるということです。これらの仕事を通して、私どもは先生から多くの恩恵をいただいているわけです。

実は、私はこれまで広瀬先生がおいくつ考えたこともなかったのです。やや、やせ型で時々エン、エンと、から咳をしながら物静かに話される姿には、年齢を超越したものを感じていたのです。それが、もうご退職になると聞き、驚いています。

でも考えようによっては、先生にとってほんとうのお仕事はこれからです。どうかいつまでも愛車を駆って、時間などお気にされず、ほんとうにされたい事に打ち込み、楽しんでください。

お元気でどうぞ。

極限の作品を生んだ秘密

内田祥哉（明治大学建築学科教授）

私がまだ日本電信電話公社（今のNTTの前身）にいたころ、富士製鐵（後に八幡製鐵と合併して新日鐵となる）で、LGS（Light gauge steel）を造る話が始まり、断面の形（profile）を検討する委員会（軽量型鋼の断面決定とその応用に関する研究1955-1957年）が出来た。その委員長が広瀬さんで、私は広瀬さんに誘われて、そのメンバーに参加することになった。実は、ライバルであった八幡製鐵では、すでに中之島製鋼（八幡製鐵の子会社）がLGSを生産していて、その断面はおもに強度上の条件を重視して決められていた。そこで、富士製鐵の方では、もっとデザインを重視した断面を引いて、対抗しようという計画であった。当時軽量鉄骨を使った建築のデザイナーといえば、第一人者は名実ともに広瀬さんだったから、富士製鐵は広瀬さんを頼りにしたのである。

広瀬さんをこの道の第一人者にした作品は、いうまでもなくSH-1（1953年）であった。これは発売されて間もない中之島のLGSを使ったもので、こんな事が出来るのか、と建築家達をうならせた作品であった。そのうえ、彼に会った人の中には、痩せ型でスラリと高い彼の容姿を見て、この人こそがLGSの先導者と思った、という伝説もある程の人であった。

構造的なLGSの断面は、必要な強度があって、造りやすければいいという態度で決められていた。それに対し、デザイン的なLGSの断面というのは、継ぎ手・仕口、家具造作などの取り合いが具合のいいものでなければならない、というのであった。

そのためには同じゲージのチャンネルでも、外側を測ってラウンドナンバーのものと、内側を測ってラウンドナンバーのものと2種類必要という具合で、それをx軸とy軸の両方で考えると、2×2=4種類ということになり、z型のものなどは、横軸だけで最大4種類考えられるから、縦軸の2種類と掛け合わせると、2×4=8種類になる。しかし、ドイツではそのような断面が市販されているという話であった。

建築を設計する側にとっては多い方がいいが、造る側、売る側からすれば、少ない方がよい、そんな議論が実に粘り強く繰り返された。

夕方から始まる委員会は、しばしば深夜に及んだ。所は、紀尾井町の富士製鐵の寮（現新日鐵寮）。今のホテルニューオータニの入り口の前で、有名な料亭福田屋の隣であった。広瀬さんは、仕事や授業を深夜にするという話をよく聞くの

であるが、そのきっかけは、この時あたりからではなかったのか？

ともあれ、この建物と、この時一緒に仕事した人たちの印象は強く残っている。実はこの建物、目下移築中である。移築先は渋谷の南平台にある新日鐵の敷地で、社長公邸として迎賓館に使われるという。当時は、誰もそんな建物と思っていなかったように思う。なにしろ仕事が多いので、製図板を持ち込んだり、寝ころんで原稿を書いたりしたことを覚えているからである。

2年前、新日鐵からこの建物の調査が木造建築フォーラムに依頼された。なつかしい想いを込めて、建物に入った時に、その格調の高いこと、趣味のよいこと、そして仕事の丁寧なことに驚いた。あの頃、こんな立派な建物の中で仕事していたのか、という想いであった。

建物の由来については、東京大学生産技術研究所の藤森照信助教授による調査があって、それによると、旧香川伯爵邸ということになっている。移築が終わったら、思い出の人達と訪ねることが出来たらと思っている。

広瀬さんの作品で、処女作がSH-1とすると、その延長上にあるSH-30は完成作である。私は、講義や原稿で、何度この作品のお世話になったかわからない。「SH-30は広瀬鎌二の代表作であるだけでなく戦後の鉄骨住宅が到達した一つの頂点である」（現代日本建築家全集17-P110）といわれるように、この作品の完成度は極めて高い。

その作品が生まれた背景には、彼がその頃つくっていたビルディングエレメント別のディテールシートがあると思っている。そのディテールシートは、SH-1からSH-30までの蓄積で出来ていて、あらゆる部分のディテールがカード風に整理されていた。もちろんSH-30だけのものではない。私の想像では、SH-30のためだけにつくったディテールはほとんど無いが、あるいはまったく無かったのではないか。

だからSH-30の設計では、プランとデザインに専念できたのであろう。しかもあれだけ洗練されたディテールが揃っていれば、デザインで考えることはプロポーシオンだけでよい。それが、あのような極限の作品を生んだ秘密ではないか、と私は考えている。

広瀬先生のお名前に接したのは、戦後が全く抜けていない学生時代の頃でした。復興、新しき日本が合言葉であっただけに、やる気一杯、デザインに青春をかけていました。焼け野原になった都市、それに目を細めて未来都市像を夢見ました。広島が私の終戦を迎えたところで、そこに昭和22年に小さな小屋を建てたのが、建築に触れた人生最初のデザインだったのです。細い部材を使い、白壁仕上げの素朴なものだったのですが、はきだめの鶴ではないが「焼け跡の白鷺」といった感じで、意外と目立っていました。材料がない、人がいない、運ぶ車がない、憐れな状況にしてはそれなりに見られるものでした。近所に米軍の図書館が出来、オズオズと中に入って手にしたのがアメリカの建築集だったのです。何もかもが羨ましかった。羨ましがものど人をつなげたのでしょうか、デザインの道を求めて芸大に入り、そこで広瀬鎌二の軽量鉄骨による住宅に接したのです。アメリカの住宅は手の届かない遠い世界だと思っていたところ、先生のお仕事はどの点をとっても私にピッタリ符合するのを覚えるのです。戦後建てた白壁のバラックとはいえ、細い部材が作り上げたかたちにそれなりの美しさを感じていただけに、整理された先生の仕組みには、まさに一陣の爽やかな風が胸を吹き抜けるのを感じたのです。誰にでもつくれる、優雅で上品なたたずまい、先生はそれを示してくださいました。

その頃日本人は自信を失っていました。それとともに品位も横に置いた、そんな時代でした。先生の凛としたデザインが自信と品位を一挙に取り戻した感じがしたのは、私だけではなかったと思います。私にとって初めての美と生産技術の融合、現代建築の原風景といってよい程のものでした。苦しい時代でした。しかし、だからといってただ単に住めればいい、便利で役立てばいいというものではありません。魂の源に触れる精神の快感がなくは、何の芳せぞあつてと言いたいところですが、日本文化の伝統に根ざしているところが私を泣かせ、建築に夢中にさせたのです。あえて私が言うのもおこがましいことですが、部品のすべてがインダストリアルデザイン・オリエンテッドなのです。誰でも、何時で

も、何処でも出来るこれからの住居、これぞ日本の明日であり、希望です。デザインが人に生きる夢と希望を与える、それこそデザインの真骨頂というものです。

なくなった池辺陽先生の御縁で、初めて口をきいていただいた時は、本当に感激でした。細身の凛とした姿勢に静かな語り口。先生の全てがまさに先生だったのです。先生の優しい、そして強烈な印象は、ちょうど張りにはりつめられた白いガセン紙のようで、「さあ、この上に何を置いてもいいよ」と言われればかりでした。その頃私の心の中では、建築と道具の関係が頭をもたげていましたし、インダストリアルデザインとしての道具概念がどんどん拡大していたのです。ふき清められた床の間を一輪の花で飾る、そんな厳しさを感じさせる先生の空間は、果たしてどんな道具がふさわしいか、大変なチャレンジです。道具の存在をより存在たらしめる、空間に値する道具とは、と思いついて今日に至っております。台所設備や道具の数々を始め、水廻りをいろいろ風呂タブ、便器、そしてテレビ、家具の一連、自動車に至るまで、融合集散を試みては「インダストリアルデザインで住まいが出来るはずだ」。……先生の刺激は続いているのです。先生のパーツ論が空間を創ったように、道具も空間が出るよと言われているようではありません。

私の属しているGKでは仮設建築論や道具論を求めて40年近くになりますが、思えば広瀬先生の優しく、そして凛とした姿勢が、我々をしてただ欲しいものをつくれば人は満足するといった、だらしない態度から救ってくれるように思えるのです。

焼け跡から50年、何とか生きてまいりましたが、今こそもののあり様をきわめる時代に入ったと思います。今後とも先生のご健勝と変わらない厳しい御指導を賜らんことを切に祈って筆を置きます。

私が広瀬先生にお目にかかったのは、残念ながらほんの数回しかない。そのなかで最初の機会ではなかったかと思うのが、武蔵工大所蔵の蔵田周忠旧蔵本の閲覧である。各大学に、まだその草創期の中心教授の体温が残っていた最後の時期という気がする。蔵田先生はすでにおられなかったから、広瀬先生にそのとき、ごあいさつしたのではなかったか。20年位前のことである。

その頃の私にとって、広瀬鎌二という名は池辺陽、内田祥哉らの先生とならんで輝いていた。建築の工業化、合理化のプロトタイプを追求する三羽鳥のように、学生たちの目には映っていたのである。昭和30年代から40年代にかけての時代には、建築の進むべき方向がその中に凝集されているように見えたものであった。

建築が他の工業化された分野に比べて、どれ程特殊な1回限りの技法のよせ集めであるかが感じられるにつれて、工業化の手法のもっている魅力は多くの学生を捉えていった。しかし、昭和40年代後半から50年代にかけての大学闘争あるいはオイルショック等によって、近代化のもつ問題点、生産の側からの合理性追求に対する疑念などが提出されるようになるに及んで、工業化建築に関する論点も次第に変化していったように思われる。工業化という課題が、現実の住宅生産のなかでは十分に消化されてしまったという側面もそこにはあったのであろう。池辺先生は比較的早く亡くなられてしまったが、広瀬先生や内田先生の研究の方向性は、工業化の方法論から、工業化を支えるさらに基本的な建築の方法を求めて、より広い視野に向かっていったのではなかったか。伝統的な建築の技法、木造建築のシステムへの興味は、こうして先生方のなかで広がっていったように思われるのである。

これについては、私のなかでひとつの仮説がある。建築の近代的方向性を見出していくうえで、ドイツ工作連盟が果たした役割は非常に大きいのだが、この工

作連盟は1914年の大会で「標準化」と「規格化」の重要性を打ち出すのである。これが近代建築史上の極めて大きな方法上のターニング・ポイントではないかと思われる。この方向を主張したのが、ヘルマン・ムテジウスである。彼はドイツ工作連盟の結成直前まで滞在しており、当時のイギリスの建築界の動きを学んだといわれている。だが、彼はイギリス滞在前に、エンデ・ベックマン事務所というベルリンの建築事務所の所員として日本に滞在しているのである。

建築における「標準化」、「規格化」という概念を、彼は明治初期の日本の木造建築の木割りや建具のシステムから学んだのではないかというのが、私の長らく抱いている仮説なのである。近年、当時のエンデ・ベックマン事務所関係の資料発掘は大幅に進んでいるが、私の仮説を裏付けてくれるような都合のよい資料は出てこない。

だが、広瀬先生の建築の工業化への眼ざしと、伝統建築への眼ざしが統一されたものである以上、先生の視点、軌跡から、逆に日本の伝統的な建築技法のなかに含まれている普遍的方法論が浮かび上がり、それを通じて「ヘルマン・ムテジウスが見たもの」が明らかになるのではないかという気がしてならないのだ。それは建築史的方法とはまったく呼ぶことのできない、横から歴史を見る方法にかすぎないけれど、私が広瀬先生の軌跡全体にトータルな興味を抱いていることだけは事実なのだ。

先生の軌跡のなかに、工業化時代が成熟を迎えた段階における、建築研究の方向を見出し、さらにそれを初期工業化時代における建築家たちの方法意識と、合わせ鏡のようにして捉えることは可能だと思ふのである。それは建築を、建築以外のものによってではなく、建築を通じて解明しつづける研究者だけが示しうる軌跡であるからだ。

真の教育者、広鎌さん

広瀬鎌二さんと初めてお会いしたのは、たしか建築学会の委員会であった。当時は、LGS(Light gauge steel=軽量型鋼)を駆使して、矢継ぎ早に住宅を発表されておられた頃だと記憶している。

広瀬さんのつくり出されるLGSの建築は、その当時の木造の仕口を見馴れている私達にとっては、何か一種の魔法のような軽々としたもので、次にはどんな新型が飛び出して来るかという期待に胸を躍らせるような迫力をもつものであった。私は今でも古い雑誌を引っ張り出しては、当時の広瀬さん(我々はこういう呼び方の中で、彼に対する親しみと敬意を表していた)のディテールを改めて眺めることがある。広瀬さんの作品には、何故これだけの魅力があるのか。その秘密は、彼のあくなき執念がそのディテールのすべてを覆いつくしている点にあると思う。私が通信省営繕部設計課から武蔵工大に移り、昭和41年に退職して事務所に専念しようと決心した時、まず相談したのが三宅敏郎さんであった。私が退職するからには、どうしても私自身でその後をお願いできる方を考えたいと思ったからである。その人は、もうはじめから広瀬さんに決めていた。だから、後はどうやって広瀬さんをくどき落とすかというだけの問題である。幸い、三宅さんは広瀬さんの同窓ということもあり、土橋通りにあった当時の建築学会の向かいにある喫茶店で、広瀬さん、三宅さん、それに私の三人で話し込んだ。

高橋 訖一 (建築家)

当時、制作に忙しかった広瀬さんは、想像通り、言を左右にしてなかなか首を縦に振ろうとしない。けれど、その首を縦に振らせたものは、「なんだかんだ言ったって、これはあなたの母校の問題なんだから」という一言が、ついに決め手になった。その時、あの一見ドライ風な広瀬さんの、母校への熱い思いを垣間見たような気がする。

それからは、ほんの時々しかお目にかからなかったが、お会いするたびに、こちらがど肝を抜かれるような詳細な木造古建築の組み手の図面を見せていただくことが出来た。もう4年程以前のある日、突然広瀬さんから電話があって、研究室の人達に何か話をしてくれという。こちらも軽い気持ちで引き受けて「何時に伺いますか」との問いに、「そうですね、夜の7時か8時頃はどうでしょう」と言われたのには驚いた。だが、研究室に伺ってみると、豊が引いてあり、やはりこれは8時からの話がピッタリだなあ……などつつまらぬ感心をしなが、夜の更けるのも忘れて話込んでしまった。

しんしんと更ける夜空を眺めながらの帰途、やはり広瀬さんは根っからの教育者だどつくづく思う。あれからまた、明け方まで研究室の人達は作業をするのだという。まさに寺子屋のお師匠さんと呼ぶにふさわしい広瀬さんの人柄は、夜が似合う。もう二度とは出ないだろう真の意味での教育者を惜別する思いは深い。

翼よ！あれがパリの灯だ

本多昭一 (京都府立大学教授、新建築家技術者集団事務局長)

広瀬先生の設計された住宅を、初めてじっくり拝見したのは、三一書房の『現代日本建築家全集』の作品解説を書いた時である。

1971年のことだから、もう20年以上になる。建築批評とか解説などを書いた経験もなかったが、とにかく住宅は住みやすさ・使いやすさが第一と考えていたから、住み手に直接会って話を聞いて書こうということにした。

作品解説の類は、ほめるものが多いようだが、自分は自然体で、よくない点はよくないと遠慮なく書こうなどと、若気の至りで考えていた。

実際にその家に行き、奥さんにいろいろ聞いて、現物をゆっくり見ると、建築雑誌の記事からはわからなかったことが見えてきて、私としては非常に参考になった。

SH-30にうかがった時のことであるが、あのすてきな居間に、雨もり受けのポリバケツが堂々と置いてあるのには驚いた。その日は晴れで、雨もりはしていなかったから、見学者が来る時だけ、バケツをかくしておくこともできたはずである。全集出版のための見学であり、事前に設計者の了解を得ての訪問である。雨もりなどということは、伏せてしまえばそれまでである。

それをかくさずに出しておく住み手と設計者……これは面白いと思った。住み手は実に隔々まで、その家を愛しており、設計者への信頼も絶大であった。「とても住みやすい家で、私ども大いに満足しています」とのことであった。

いくつかの家を見学し、住み手のお話を伺って感じたのは、広瀬先生が住み手の希望を實にいていねいに聞いて設計を進めているということであった。

一方で先生は、鉄骨の組み方・ジョイントをはじめ、構法的な面でほとんど一作ごとに新しい試みをされていた。それらは、一般解としての面で、建築界に刺激を与え続けていた。構法的な面だけでなく、住宅の各部の空間デザインにも毎回新しい提案があった。

そうした試みを積み重ねながら、同時に個々の住宅は実用のもので文句なしに仕上げていくところが、さすがにプロだなあと感心させられた。

感心させられたのには背景があった。『現代日本建築家全集』第17巻は、池辺陽・広瀬鎌二という組み合わせであったから、両者の設計作品を見ることになった。両者とも、独創的な提案を次々と出す点では共通していたが、住み手の反応はかなり違った。池辺先生の場合は、新しい試みを鮮明に出すことが第一となっ

て、ややもすれば住み手の無理を強いる面があった。住み手が私に、いろいろ使いにくくて困る点を訴える例がよくあった。中には、一例だけだが、設計者に対して怒っているから見学させないというお宅もあった。

広瀬先生の思い出を書くために、一方をわざと悪く書いていると思われては心外だから補足しておくが、池辺先生も住み手の意見を無視してやったのではない。私がお話を伺った方も、設計の段階で池辺先生の提案に同意し、承認したと言われた。たとえば、土足のままで生活すれば玄関の靴ぬぎは不要だということで作ったが、住んでからまた靴をぬぐ生活に戻ってしまったので、靴ぬぎがないのは不便だという形である。

だからこれは善悪ではなく、方向性の違いのようである。つまり、池辺先生は住み方も含めて新しい試みをしようとされ、広瀬先生は住み方は住み手の好みにまかせて、構法などハード面での試行に力を入れられたということかもしれない。

こんな勝手なことを書いたが、お二人とも私たちから見れば大先輩で、当時若僧の私などが作品解説を書くのは全くおこがましい限りであった。何でも、池辺先生の作品について書くのはしんどいということで、何人もの書き手が辞退して、しかたなしに私に回ってきたらしい。

当時、剣持 さん(故人)たちと綜建築研究所という集団を作って、日本の建築生産の工業化・近代化を進めようという立場から、アチコチを(生意気に)批判しまくっていたから、あいつに書かせてみようかと誰かが回したのであろう。

とにかく偶然にも、いくつもの住宅をじっくり見ることができ、広瀬先生の設計の面白さ・奥の深さに触れることができたのは幸いであった。

ずっと後に、新建築家技術者集団(新建)の東京支部代表幹事に、池辺先生と広瀬先生に続けて就任していただいたが、不思議なご縁だと思う。

SH-67の解説のタイトルに「翼よ！あれがパリの灯だ」と付けた。キュービックユニットは時期尚早だと言われる中で、苦勞してユニット組立式住宅を試みる広瀬先生の営為に、「大西洋横断はまだ早い。あと10年待て」と言われながら、「10年後のために、今私が飛ばなければ」と言いきるリンドバークを重ねてみたのだが、その後お付き合いして、先生には「紅の豚」のような感じもあり、あれは間違っていたのかなと思うこともある。

鎌さんとの1/2世紀

ワープロミスで「鎌」が縦倍角。この名はSHシリーズのペンネームの様だ。いつか書いたが、学生時代の写真に残る「鶴の如き姿」は50年たっても変わらない。

我々の山手教会見学の時、一人紛れこんでいたのが上級生の鎌さんだった。モダン建築の旗手、蔵田教授は、旧スタイルの建築を賛美しただけで「それよりもよい建築を」と火の出るように叱る。その怖い教授から突然「あのゴシックはよいから見てこい」と言われた。たぶん、西欧建築も見ないで青春を終える運命の教え子が哀れだったのだろう。

広瀬氏は一浪で、中でも若かった。素直に見学についてきたのか、ゴシックを見たかったのか。

復員後、「広瀬を（武蔵の）専任に」との蔵田先生の意を受け、彼と再会した。皆、生活でそれどころではない時代。結局、公務員の私が手伝うことになる。

事務所を訪問した。中原暢子さんを怖がらせた片持ち踏板の木造階段を昇る。私は迂闊にも途中で気がつき、立ち竦んでしまった。この頃から「広瀬式リミット構法」が始まる。こちらは通信の官庁舎ばかりだから、ヒョロヒョロ建築の話に聞き入り、用件は後回し。彼の活動を続けるべきだと思われ、逆に誘われて吉武ゼミに参加させられた。

しかし、SHシリーズが広まる程、事務所経営は苦しくなる。施主は「広瀬式」ローコスト住宅に共鳴する合理生活者だから、無駄なことはしない。

共鳴者からの注文は多いけれども、安上がりの住宅だから設計料もまた安い。

たまにはコンクリート構造をやりたいと協力を頼まれ、夜になると銀座の広瀬事務所にかよった。コンクリートシェルでやるというので、饅頭型筒形断面の部屋を、1/20で紙模型を作った。

「建築文化」に洞窟から江ノ島を遠望した、デザイン通の完成写真が掲載された。しかし、批評はアクロバット構造だと、散々である。聞くと、工事屋もすべて「広瀬式」軽鉄のベテランで、紙模型のように肋骨リブに鉄板を張ったという。やはりヒロカマさんだと思った。

事務所も盛大?になって、所員もふえた。が、若かった人も妻子を抱えて苦しそうだ。ドクターをもっている広瀬氏に、武蔵に来てもらうにはよい機会だった。「ドクターストップ」というわけである。

銀座の事務所は梁山泊であった。3階の渡辺力事務所には若手の（渡辺）俊さんほか、美男子、美女才媛。群れつどう写真、編集、建築、デザイナーなど、当

時無名の若手。私を含め、いまだに毎年集まっている。銀座の夜は12時近く、客送りのガヤガヤ。次のガヤでホステスは引き上げ、電車がなくなる…。

この夜行癖は広瀬研に今でも受け継がれている。教授になってから、驚くほど学究生活に浸りきってしまった。安保の頃、学生運動に火がついた。主任教授からの要請で大学に駆けつけると、先生たちは教壇でつるし上げられていた。

こちらは全通出身、ヤッケに身をかため調停に入る。言い分を聞くと「夜中に授業をする先生がいる。寒いので暖房を入れてくれ」等々。何十ヶ条の要求を入れることを先生に勧告し、ノンポリ学生は凱歌をあげて解散。中核派が怒ること。要するに学生も「俺たちは勉強したいのだ」である。「夜中に授業をする先生」とは、広瀬教授のこと。

従来からのMC研究に専念し、最近学会の委員長として、その体系をまとめて刊行する仕事を終えている。博士論文は「この研究を生産続けます」との誓約書である。彼は見事にライフワークを貫いた。MC研究の盛期の人たちは、今では彼一人になってしまった。国際会議代表だった私も、いっこうに基準化しない行政に愛想が付き、研究放棄を言い出したくらいである。彼がMC論文を日光山中の彰国社山荘で書いたことは、知られていない。私も一泊した宿。木立に囲まれ、簡素だが洒落た調度の数寄屋建築とMC論文の取り合わせは、今のヒロカマさんを象徴しているようだ。

大学では、日本古建築の構法解明を手掛け出した。古墳、木組から始めて最近の復原設計にいたるまで、深夜まで取り組んでいた。第二のライフワークが続くことを祈る。この分野に彼が凝り始めたのは、『ディテール』誌が創刊された1964年頃からだ。若い鈴木嘉吉氏等との対談が契機だと言っているが、建築家なら古建築への関心は深い。プレコンをやっていた私も茶室建築で遊んでいる。蔵田先生が生きていたら、二人とも破門だろう。

二人とも戦中派で同年齢。人生3万日として、仕事をするのは、あと2千日となった。海軍設営隊で、カムラン湾から引揚げた私は、ヒョロヒョロの広瀬氏は兵役免除だと思っていた。ある朝、工兵隊全員がいなくなり、広瀬氏は一人だけ兵舎に残された。「建築をやらせた方が役に立つだろう」と除隊にされたとのこと。その工兵隊の行き先は、硫黄島だったという。

おたがいに生きていたから50年もつき合えたと、仕事も出来た。若い人たちにも何かを伝える時間があった。生きてることは素晴らしい。

三宅敏郎（武蔵工業大学講師）

建築家広瀬鎌二 VS イラストレーター宮脇 檀

宮脇 檀(建築家)

日大で私のコースを持つことになって、サテ、まったく何も知らない学生達にどうやって居住空間というものを教えていこうか、と悩むことばかり。図面を描くということ、空間を把握するという、素材の役割を理解させること……それぞれ従来の通り一遍風な教科書は使いたくない。---ということで、毎回教材は私自身がワープロで打った「塾長通信」を発行し、図面を理解させるためにはピーマンを輪切りさせて断面・平面の見え方から始め、木材を理解させるために吉野の山中に合宿させ、木を触らせ、担がせ、削らせる等々……。

木構造を教える段になって、山本学治さんに習った様な、力の流れや構造の考え方を教えてみようと思うのだが、例によってよい教材がない。そこで、フト思い出して古い「モダンリビング」を引っぱり出してみた。アリマシタ、アリマシタ。広瀬鎌二さん全巻執筆「モダンリビング」31号『軽量鉄骨の家』（1960年10月刊）の全頁に私が描いた漫画風イラストが……。自重・積荷重から圧縮・曲げ・ピン・ローラーetc.を漫画の人間を使って説明しているのである。その稚拙さ……。けれど一生懸命主婦に構造を理解させようとしている広瀬さんの気持ちをどう絵で表現しようかと、苦心の跡がアリアリと見れたのが救い。

実はその頃、私はまだ芸大の学生。芸大の建築科には代々先輩がもっているアルバイトの口を後輩に譲っていくというシステムがあった（その代わり、卒業設計を手伝うというバーター協定があったのだが……）。

私は大学2年生のときから婦人画報社の「モダンリビング」の仕事先輩から引き継ぎ、始めは当然、平面図のインキングや簡単なパースなどを描いていたのだが、次第にエスカレートし、校正、レイアウトからイラスト、取材、企画まで手伝わされ、最後には婦人画報社の他の料理からファッション誌のイラストまで描くようになって、とうとう東大の大学院まで6年間くらい、当時の名編集長、渡辺曙さんの下で働き続けることになってしまった。

このアルバイトは、そこで女房と知り合ったり、帝人メンズショップという私の処女作になる仕事を石津謙介氏からいただいたりと、いろいろ重要な節目を与えてくれたのだが、忘れてならないのは池辺陽、広瀬鎌二という当時新進、売り出し真っ最中の若きヒーロー達と御一緒できたことである。

当時の「モダンリビング」は、渡辺曙さんが新しい住宅の啓蒙普及を計りたい

と、情熱を傾けていた独自の雑誌であった。最初は池辺陽さんが何度も何度も全巻特集的に執筆していて、例の工業化理論をせっせと展開していた。池辺さんは、当然私達学生のスター。その先生の原稿にイラスト描くだけでは我慢できなくて、最後は池辺さんが新制作展に出品する模型をつくるために市ヶ谷のあのガラス貼りのお宅に通ったこともあった。

当時の建築界の状況は、戦後まだ大建築が少なく、清家、池辺、山口文象、広瀬、増沢などといった若きスター達がつぎつぎと問題作を提案しては私達学生の胸を轟かせていた時代だった。

清家さんの一連の和風住宅、池辺さんの工業化理論、山口文象さんとRIAのロウコスト住宅、増沢さんの自宅やコアシステムなど……。

広瀬さんは、私の記憶では銀座の小さなビルなどの後に「西京風の家」という名前前で登場したのが最初であったと思う。当時皆が追求していたモジュールのキッチンとした木造垂構造の密度の濃い住宅で、続く「続西京風の家」とともにしっかりとした住宅作家だと意識されていた人だった。

その広瀬さんが突然「SH-1」という問題作をひっさげ、鉄骨住宅という新しい世界を見せてくれたのは1953年のことである。朝鮮動乱で育った日本の軍需産業が民需に展開するために、軽量型鋼の生産を始め、それを住宅に使用できないかという要請があったのだと思うのだが、それまでの木造住宅の和風っぽい切妻屋根のプロイヤー的平面に、ソロンロ厭きかかっていた私達学生には、実に新鮮に写った。木造住宅時代に掌中にしていた硬いプランニングを下敷きとしたオープンなプラン、細い柱（当時はよいサッシュバーが無くて、柱の方がサッシュよりも細いという笑話があったくらい）と大きなガラスは、誰にもファンズワース邸やジョンソンのガラスハウスを想わせ、日本の戦後が終わり、西欧に対等に並べるレベルが見えてきた！と感激したのもだった。

その広瀬さんがつぎつぎと鉄骨住宅の「SHシリーズ」を発表し続け、その普及のために「モダンリビング」の全1冊特集をつくることになり、カン詰めになっている都市センターホテルの一室に一夜私が詰めて、徹夜で書いている広瀬さんの原稿が上がるたびに、脇の机でイラストを描いていたのだ。たしかそんな徹夜が何度か続いたはず。私も広瀬さんも、考えてみれば若かったナーという感慨が……。